

2020/06/21

ヨハネの福音書 講解メッセージ③

「世の罪を取り除く、神の子羊」ヨハネ 1:18-34

■あなたは何者か

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」(ヨハネ 1:18)

神は、父と子と聖霊の三位一体です。この神に上下関係はなく、「ひとり子」という表現は、神は一体であることを表しています。

三位一体の神ご自身が、それを証しするためにこの地上に来られた理由は、神が証ししてくださいなければ、人は神を知ることができないからです。人間の理性でいくら考えても、神を知ることにはできません。私達が神と出会うことができる道はただ一つ、証しされたことばを信じること、つまり、信仰によってだけなのです。

「ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。彼は告白して否まず、「私はキリストではありません」と言明した。また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちが遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」(ヨハネ 1:19-23)

人々は、神が約束したキリストを待ち望んでいました。祭司とレビ人が「あなたはどなたですか」と聞いたのは、「あなたがキリストなのか」という確認です。それで、ヨハネは「私はキリストではない」と答えたのです。

もしあなたが「あなたは誰か」と聞かれたら、どう答えますか。血肉の関係ではなく、神との関わり、神との霊的なつながりを問われたら、どう答えることが出来るでしょうか。

ヨハネは自分のことを「神を証しする声」と答えました。「初めにことばがあった」(ヨハネ 1:1)とヨハネの福音書は語りますが、バプテスマのヨハネは、自分はその「ことば」を伝える「声」だと言ったのです。これは、自分がキリストのからだの一部分であることを明確に自覚しているということです。

多くの場合、人は神との霊的なつながりで自分をとらえようとせず、肉のつながりで自分を誇ろうとします。しかし、肉によるものは神の国を相続することはできません。

原因と結果を関係づけて考えることを因果律と言いますが、その原理によって考えると、今自分が生きているのは、両親がいたからと考えることができます。人間は物事に対して原

因や関係性を見出そうとする習性を持っていますが、それは三位一体の神が互いを一つとする関係性を保つ運動をしているからです。

私たちが存在するのは、両親がいたからです。そして、その両親の始まりをたどっていくと第一原因である神に行きつきます。私たちの存在は神から始まり、川の流れのように、ドミノ倒しのドミノのように、つながって存在しています。この流れを愛と言います。神は人を造り、愛という霊的な川の流れに置きました。人はこの流れに沿って生きることもできるし、それを無視して生きることもできます。つまり、人を愛することもできるし憎むこともできます。神を愛することも憎むこともできます。しかし、神の愛の流れに逆らって生きると、つらさを覚えます。それは、神の言葉を信じようとせず、逆らって生きることが罪だからです。罪を犯すと人はつらく感じますから、人を愛せないとつらいのです。

神の愛の流れに沿って生きようとするなら、自分は神の一部であることを確認して生きることができます。しかし、肉のつながりを誇るなら、その愛の流れを外れてしまいます。人にとって重要なことは、愛の流れの中で生きることです。愛が希望と信仰を生むのです。この3つだけがいつまでも残るものであり、他のものはすべて朽ち果てます。自分が何のために生まれ、何のために生きるのか、愛の流れの中で自分を捉えることができるなら幸いです。

■世の罪を取り除く神の子羊

「彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった。彼らはまた尋ねて言った。「キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」ヨハネは答えて言った。「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のベタニヤであって、ヨハネはそこでバプテスマを授けていた。」(ヨハネ 1:24-28)

「バプテスマ」とは「浸す」という意味のギリシャ語です。全身を水に浸したら、溺死してしまいます。バプテスマは、そこから引き上げられることによって生きるものとなる、つまり復活を表しています。当時のユダヤ人は、神の宮に行くときは手や足を水に浸して清める習慣を持っていました。そこにヨハネが意味を加え、古い自分に死に、神と共に生きる者になる決心を表す1回限りの行為として、バプテスマを始めました。

神に立ち返ることを日本語は「悔い改め」と訳しますが、本来の日本語が持つ意味とは異なります。聖書が教える「悔い改め」は、反省や後悔ではなく、「神に立ち返ること」です。ユダはイエス様を売ったことを反省し、後悔して自殺しました。ペテロもイエス様を裏切ったことを後悔し、神に立ち返りました。「反省」と「立ち返ること」は、まったく違います。この世界は反省を求めますが、神は立ち返ることを求めます。バプテスマは、古い生き方をやめて神に立ち返るという意味があります。ヨハネは、これをキリストと共に生きるための

準備として広めていたのです。

「その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」」（ヨハネ 1:29）

小羊（子羊）とは、ひとり子なるイエス・キリストのたとえで、神との親密性・一体を表しています。キリストは、父なる神によって造られた方ではありません。子羊は羊です。神の子は神です。「この方は、初めに神とともにおられた」（ヨハネ 1:2）とあるとおり、キリストは、初めから父なる神と共におられた神です。三位一体の神はそれぞれが同格・同質で、お互いが支えあう関係です。そのキリストがこの世に来られたのは罪を取り除くためです。

「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」（ヨハネ 16:9）

罪とは、神との関りにおいてとらえるものです。この世の考え方では、人との関係で罪をとらえ、悪いことをして人に迷惑をかけることだと思われていますが、聖書の考え方はそうではありません。イエス様は、「罪とは神を信じないこと」と定義なさいました。つまり、「罪を取り除く」とは、「不信仰を取り除く」ことです。

なぜ私たちは神を信じられないのでしょうか。それは、悪魔の仕業で死が入り込み、この世界が朽ちるものになってしまったからです。神は、永遠なる方で朽ちることがありません。しかし、死が入った結果、この世界は有限性になり、永遠なる神を認識できなくなりました。これを「死」と言います。つまり、この世界で神を知ることは不可能なのです。

この世界で神がいるとかいないとか論争しても、それは人間の理性が作り出した想像の世界です。カントは、想像によって神を論じることを「理性の暴走」と呼び、人間の理性には限界があることを証明しました。理性で認識できない神を認識する唯一の方法は、誰かの証しを信じる道だけなのです。

有限性の人間に、永遠性の神がわからないのは当然です。そこで、自らが有限性の姿になって神を証しするために来られたのが、神の子羊です。そして、神の愛が認識できず不安に陥っていた私たちに、愛を見せてくださいました。それが十字架です。イエス・キリストは、私たちの罪の罰を受けて十字架に架かったものではありません。神の愛を示すために十字架に架かったのだと聖書は証言しています。それによって、私たちの不安という負債が取り除かれるためです。不安が取り除かれることによって、肉なる罪からきよめられるというのが、神が用意した福音です。その恵みにあずかりたいと願うのであれば、あなたの罪を言い表すようにと、神は教えておられます。イエス・キリストは、とにかく罪人を赦されます。誰も裁きません。ご自分を十字架につける者たちすら赦し、それでも私はあなたを愛していると愛を貫かれました。これが神の愛です。これが罪を取り除く神の子羊です。

■聖霊によるバプテスマ

「私が『私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたからだ』と言ったのは、この方のことです。私もこの方を知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです。」またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」(ヨハネ 1:30-34)

なぜヨハネは、会ったこともないキリストがわかったのでしょうか。それは、神によって霊的に教えられたからです。私たちがイエス様を見たことはありませんが、信じています。それは、神が教えてくださったからです。ここから、信仰は告白する前に与えられていることがわかります。「心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」(ローマ 10:10) とありますが、まず神によって信仰が与えられ、告白にいたるということです。

さて、イエス・キリストがバプテスマを受けた際、「御霊が鳩のように下った」とあるように、聖霊は鳩に象徴されます。それで教会のシンボルマークには、鳩が下ってきたデザインが多いのです。

ヨハネはこの時、「この方は聖霊によってバプテスマを授ける方である」という天からの声を聞きました。「聖霊によるバプテスマ」とは、聖霊で満たしてくださるということです。神に立ち返るなら、私たちは聖霊で満たされます。聖霊に満たされると何が起きるのでしょうか。

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」(ローマ 8:26)

聖霊に満たされるとは、神が私たちを助けてくださるということで、異言で祈れるようになります。使徒の働きの中に、弟子たちが聖霊で満たされたとき、異言で祈り出した様子が記されています。異言とは、神に対する祈りを聖霊がとりなしてくださるということです。自分の言葉で祈っていると、だんだん同じことの繰り返しになり、どう祈ればいいのか言葉がなくなってきて、それほど長くは祈れません。それを助けてくれるのが異言です。

祈りとは神との交わりです。異言で祈ると神と交わる時間が長くなります。共に過ごす時間が長くなることで、だんだん相手に似るようになります。相手の力をもらうことができるのです。カウンセリングの世界では、「受容」が大切だとよく言われます。自分の意見を挟まずただ相手の話を聞くだけですが、聞いてもらったほうはとても元気になります。交わって

聞いてくれる相手がいると、それだけで励まされて力を得ることができるのです。つまり、異言は神との交わりの助けです。神と過ごす時間が長くなり、深く交わることができるようになると、神から力を受け取ることができるのです。

「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」(ローマ 8:13)

聖霊に満たされると肉の行いを殺すことができます。私たちは、肉の世界で肉の欲望に引っ張られて生きていますが、聖霊に満たされることでこの欲望に勝利することができるようになるのです。

かつてアメリカの教会で、異言で祈るようになって何が変わったかという証しを聞く機会がありました。アルコールや薬物の中毒から解放されたという方々が大勢いて、彼らは自分が本当に変えられた経験から、熱心に力強く神を証ししました。それが 20 世紀のペンテコステ運動となり、キリスト教が大きく広がりました。

聖霊に満たされると肉の行いを殺すことができます。肉の行いとは肉の安心です。その筆頭は、快樂ではなく、人から良く思われることです。しかし、聖霊に満たされると、そんなことはどうでもよくなります。聖霊で満たされると、神がとりなしてくださり、肉に勝利することができます。聖霊が神を証しできるように助けてくれるようになるのです。

ただし、異言で祈ることだけが聖霊のバプテスマではありません。それは、あくまで聖霊に満たされることであり、必ずしも異言を伴わなければならないわけではありません。

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。」
(ローマ 8:15)

当初、使徒たちはすぐに伝道することを止められ、「聖霊のバプテスマを待ちなさい」とイエス様に言われました。初めはその意味はよくわかりませんでしたが、ひとりひとりが異言で祈るようになってからの弟子たちは、キリストを大胆に証しするようになり、キリスト教は全世界に広がっていきました。聖霊に満たされると、証しするようになるのです。異言は目的ではなく、キリストを証しする手段です。

ヨハネは、自分を「声」と言いました。聖霊に満たされると、キリストの体の一部となって、証人となります。私たちも聖霊に満たされ、自分に与えられている環境の中で証しすることを人生の柱とすることができれば幸いです。「あなたは誰か」と聞かれたとき、血肉の流れではなく、神が始めた愛の流れで自分をとらえ、自分がキリストの一部であることを確認し、これからも聖霊のとりなしの中で生きることを求めましょう。